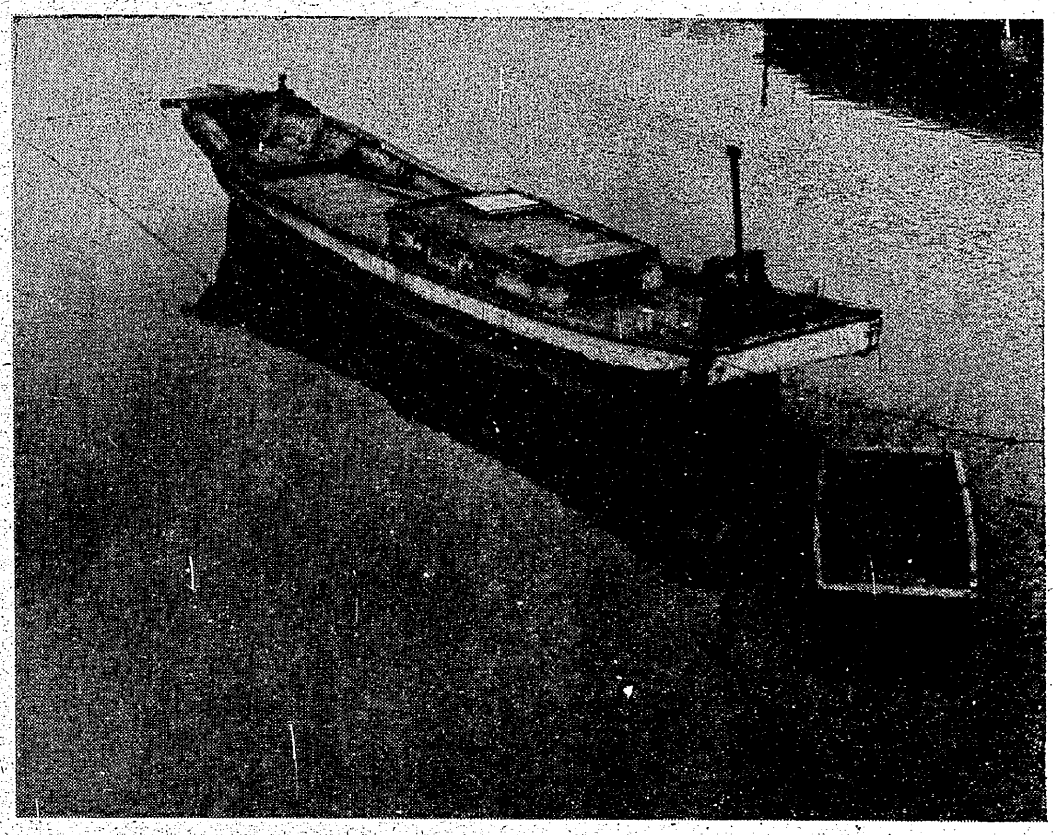

諏訪川に浮ぶ船が一つ。冬の日差しを反射しながら、やつぱり新しい年の風を招いていた。

一月の暦

1日　元旦。三池炭鉱は翌二日まで特種休日。
2日　初荷、初夢、書き初め。特種休日。
3日　三池炭鉱は特定休日。
5日　官庁御用始め。小寒。
7日　七草。（せり、なずな、ごぎょう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろ）
11日　鏡びらき。
15日　成人の日。
17日　土用。
20日　大寒。
24日　初地蔵。
25日　初天神。
26日　文化財防火デー。
28日　初不動。

×

▼…全般に、季節風が強くなって寒くなる。後半は平野部では乾燥した晴天が多く、山沿いでは一時大雪となりそう。平均気温は、平年よりやや低い見通し――とは連合通信の情報。

さあ、いよいよ八一春闘準備を職場・地域から。

随筆

追憶の中で

職場二十分会（三川）　町　佳郎

カリエスに常臥（とこふ）しの兄戦傷の証書もなく細りて逝きし思い出

去年の夏の機関紙〝みいけ〟に、終戦記念日にちなんで、私はこの歌を載せてもらった。昭和二十二年、まるで枯木が朽ち果てるように二十一歳で逝った兄のことを詠んだのである。当時小学三年生の私にとっては、忘れることのできない哀しい思い出である。

最近、防衛費増強論が高まっている中、文春十二月号の五味川純平氏の「暴力と防衛の間」を読み、戦争のために死んだ兄のことを書いてみようと思ったのである。

兄がもし生きていれば今年で五十五歳である。旧制の中学を卒えると、父の意に従って三池鉱業所に入社した。中学時代からの商船学校への夢が破れ、いわば不本意の入社であったようだ。

私が幼ない頃住んでいた社宅の西側に、捕虜収容所があった。兄は入社後まもなくしてそこの通訳をしていたが、時々兄は、幼ない私やすぐ上の兄に、チョコレートをもらってきたりした。おぼろげだがそのことがとてもうれしかったことを憶えている。

しかし時局の波はしだいに兄にも及び、やがて入隊。九州・宮崎のある基地で任務の日々を送っていたがある夜、訓練中に腰を負傷。これがその後の兄の死の原因だった。

兄にとってはこの負傷が当時、任務に支障をきたすほどのものではなかったのだろうか、それとも終戦時のどさくさの中で、負傷証明を要求できなかったのだろうか。陸軍少尉で帰還時はかなりひどくなっていたにもかかわらず、証明書は持ち帰らなかったとのことだった。

戦後まもなくして歩行困難となった兄は、とうとう病臥の身となった。そして当時難病といわれた脊椎カリエスとなってしまったのである。大世帯のわが家にとって兄の病気が、多くの困難を招いたことは否できない。まして母変わりの長姉にとっての苦労は、ひとしおではなかったと思う。

世のすべての人が生きていくだけで精一杯の時代に、病床の者はなお一層悲惨なものだった。そのような兄を何とかと思いつつ、父や姉がどんなに努力したことか。しかし日に日に弱りはじめ、十二月のある夜、兄は逝った。

兄の臨終の前にうたった歌が、「浜千鳥」である。おそらく兄は、それより七年前、若くして逝った母の面影をしのんでいたのだろう。家族みんなは、兄のまわりにあつまって、哀切のメロディを聞くばかりであった。「親父さん、死にたくない、俺は死にたくない」、と細い腕を父を向けていた姿が今も脳裏からはなれない。

二十一歳の多くの可能性が時代の荒波の中で傷つき、そしてはかなく消えた。枕の下に隠し持っていた英語の辞典が、鉛筆のあとでまっ黒くなっていた。それが兄にとってのせめてのもの生への燃焼であったのだろう。

軍備拡張がやがては多くの人の命を奪う結果になることを思うとき、たとえそれが小さな声であっても、私は力の限り反対、と叫びつづけなければならないと思っている。

外国（とつくに）のことばたくみに話しいる兄をみつめいきわれ幼なかりき
はなばなしき戦功もなく帰還（かえり）しが負傷はいたく腰に巣食いつ
昂じたる病にやがて歩みまで難（し）くなりて臥（ふ）す身となりし兄はも
「浜千鳥」かすかにうたう兄の声冷え凍（し）みる屋内（やぬち）に尾を引き流る
軍拡を煽（あお）る声巷（ちまた）にどよめけど抗（あらが）わん戦争（いくさ）に死にし兄持つわれは

園芸随筆

一生の不覚だった話

職場22分会（三川）　田上　勇

招かれて泉へ

ある夜のこと、義弟から「友人と遊びに来る」と連絡があった。

折り悪しく妻は体の具合いが悪くて寝込んでいるが、ままよ焼酎でもあれば何とかなるだろうと待つことにした。

やってきた客

約束の日の午前十時過ぎにやってきた。二、三名と思いきや、車二台で八名も。聞けば、盆栽を勉強に来たとのこと。

取りあえず私達の作風を理解してもらわなくては……と、説明よりまず友人達の作品を観て回る。どの作品を観ても、皆さんおどろくことしきり。

八名の人達は東洋ランを手がけているとか。で、盆栽まで広げてみようということになったが、何から始めてよいかわからない、とのことだった。

結果は、初対面ということも手伝って、十分な理解も得られないまま帰っていったようだった。

このことはすっかり忘れてしまい、正月も近ずいた十一月頃のことだった。

「盆栽を本格的に取り組んでみたいので、一泊の計画で指導に来てほしい。初歩だからそのつもりで……」、との招きを受けた。

さっそく土曜のある日、出かけた。二時間ばかりかけて八代郡泉村（釈迦院のあるところ。熊本県下）に着く。

「場所はお医者さんの家で六時から……」という。

招き入れられた日本間に集まった人は床屋さん、山師さん、農家の人、代書官、店主、お医者さんなど。

四、五十分もしゃべったかな、と思う頃気がつくと、勉強する割には乗り気のようでもない。

説明が悪いのだろうか、と思っている時、「焼酎でも飲みながらボツボツやりましょう」と来た。

思わざる返礼

何だかおかしい、と思って適当に話をきりあげる。

部屋がかえられた。新しい部屋へゆくと、そこには何といのししが煮えたぎっているのだった。

「半年前に、お宅にお邪魔したときの返礼」とのことだった。

つぎつぎに、いのししのいろんな料理が並べられると、田舎の人びとの真心が痛いほど胸につきささってきた。忘れもしない、その夜は「胃袋がびっくりしたろう」とはしゃぎたくなる気持をおさえて、床につく。

翌日は、形ばかりの技術指導を行って帰路へ。

後で聞いた話

後で聞いた話によれば、泉村に生まれた〝にわか盆栽会〟では、その後松の山採りに出かけていったのはよいが、ゴボー根などヨキでぶった切り、掘るというより二～三人がかりで、「セーノ、セーノ」のかけ声もろともひっこ抜くといったありさまだったよし。

あの時は、もっぱらいのしし料理を肴に焼酎に酔っぱらってしまって、山木の掘り方の指導までは思いもしなかったわけで、今になってから一生の不覚だったと悔やんでいる。

娘と私の〝時間〟

三池　中原　千春

今年二十三歳になる娘は、博多の方に勤めている。

三池始発午前五時五十五分のバスに乗るため、毎朝まだ明けやらぬ戸外へあたふたとかけ出して行く。

そして、帰宅は早くて夜八時。帰れば夕食の後片づけと、お腹をすかした二匹の駄犬が餌を待っている。

身体はいたって健康そのもので、さして苦になる風でもないが、木枯らし吹く日や雨の夜などときすがにしのびなく、私が娘にかわって仕事を片づけて置く。

こんな中での娘と私の時間は、休日を別にすれば毎日二、三時間が関の山である。それでもときには、本を交換し合って読んだり、テレビを見てはその歌謡番組に合わせて「恋人よ、そばにいて……」などと一緒に唄ったり、またあるときは娘の部屋の乱雑さに叱言を飛ばしたりもしている。

ところで、娘から見た母親は？などと、わが身をふり返って見るときもあるが、ある日のこと娘いわく――「うちの会社の人たちはお母さんのことを、〝千春ちゃん〟って呼んでるよ」。この娘のセリフから察しても、私へどういう評価になっているのか、容易に相像がつく。

この娘と私の時間に、最近奥ゆきと深みがでてきたことがうれしい。

「今日課長から、ある自民党議員の選挙事務所へ、電話作戦の手伝いに行くように指示されたH子さんが、自分は社会党支持だから行きません、とはっきりことわりなさった。偉いよネ」とか、

「会社は、やめた人の後を補充せずに、残った人にその分の仕事を負担させるからひどい合理化だ」、などと、娘も自分なりに職場の矛盾をみいだしているようである。

実際、正しいことは働く者の権利としてはっきり主張できる人間にならなくてはならない。

それはほとんど夜更けまで続くのだが、この頃そんなことも語り合えるようになった娘と私の、ほんとうに心のふれ合う時間である。

し、それをさらに大きな力に結集させるためには、まわりの人に誠意を尽じて仲間をつくらなくてはならないこと、そんな身近かなことがひいては戦争を阻止し、平和と自由をかかげる社会主義への道につながっていることを、知ってもらわなくてはならない。

〝みいけ〟

この〝姿見〟欄は、何といっても三池の主婦のものです。〝姿見〟はきっと、エピソードも生んでいるに違いありません。主婦の皆さん、今年も相変らずこの欄を自分たちの手記で綴ってまいりましょう。がんばって……。